



保育者の世界の一断片

—— ミニアチャーの中でふくらむ想像力 ——

津守 真

子どもは小さなミニアチャーで遊ぶとき、大きな世界を想像し思考している。

ミニアチャーの世界は単に幾何学的縮小の再現ではない、その小さな空間の中に大きな世界がある。保育者は子どもと一緒にその世界で動く。

回る空間の開放

プロペラの回転にひたすら目を凝らしていたT夫が滑り台の下から上を仰ぎ見たとき、その世界は未来に向かって広がっている。T夫が滑り台を下から上に登ることに



成功して一週間後、彼はホールの隅の滑り台の上で私の膝に抱かれていた。突然T夫は自分でおりてきて、ホールの真ん中に置いてあるトランポリンのまわりを走るように私を誘った。私はリズムをとって走るとT夫は私を追いかけて走った。私をつかまえるためではない。走る喜びである。T夫はこれまで下を向いてトポトポと歩いていた。いま彼は笑っている。走ることは心を軽くし、開放する。リズムはそれを助ける。トランポリンが中心にあることもこれを助けた。通常の言語の用法にも、「走り回る」という。T夫は回るものに関心をもつだけでなく、走ることがこれに加わって、回る体験が解放的になった。

そのうちに自分でやめて、滑り台の上に私の手を引いていった。だれかが下からボールを投げてくれた。滑り台の上で手を開くとボールは下に落ちる。いくつもボールを下に落とし、次にT夫自身が下に滑った。そしてふと庭に出て行った。

ミニアチャアの遊び

しばらく後、T夫は保育室の入口で、F先生と、ビニールをのぼして斜面をつくり、指先を上下に動かして滑り降りる動作をしていた。先日滑り台の遊びをわきで見っていたF先生は、T夫がビニールテープを手に見ているのを見たとき、この子の心にあの滑り台の上を仰ぎ見たときのふくらむ思いを見て取り、ただちにこれをミニア



チャアの想像力の次元に移したのだった。F先生がビニールテープをのぼして斜面をつくったとき、子どもはあのとときの滑り台の現実を内側から体験し直した。滑りがけに、T夫はビニールテープを手にもって自分で引き伸ばしていた。私はそれを持ち帰らせた。保育の最中に働かせる大人の想像力は保育を展開させる力である。

次の日、T夫は大きな換気扇と金属の枠、プロペラ、箱などを家から持って来た。母親は、宝物をみんな持って来たんですと言う。ホールの隅の滑り台の上で、換気扇を手で上に持ち上げ、天井をみつめてうなっていた。私は天井にそれをつけてくれと言っているのだと考え、苦心してビニールテープで天井に貼り付けた。T夫は滑り台の小さな空間の上方に、回るものつまり太陽をつくった。ミニアチャアの宇宙の空間で想像力はひろがる。T夫は天井からぶら下ったテープを揺らして遊んでから自分が滑り降りた。

小さな積み木を垂直に立てるー再びミニアチャアの遊び

更に二週間程後、T夫は家からプロペラとビニールテープを持って来た。庭で迎えた私は、ホールにはいるときに、一握りのレールと電車を持っていった。レールで斜



面をつくり、電車を傾斜におくと電車が滑り降りる。T夫はその電車を指先で滑らせるのを繰り返していた。私は少し距離をおいて向かい合わせに位置し、電車をT夫の方に走らせた。すると彼は小積み木を二本、柱のように立て、その間に小さな積み木を垂直に二個積んだ。ちょうど人間が柱の間に立っているかのようなのである。私はT夫が自分の表現をするのを見て、しめたと思った。垂直に立てた柱は、この子どもの中に自分から何かをしようとする意志が芽生えたことを示すものである。柱の間に立つのは自分かもしれない(図1)。

こういうとき、保育者のやりかたにふた通りあると思う。ひとつは子どものイメージネーションに沿ってこちらもイメージネーションをはたらかして遊びを継続することである。もうひとつは子どもの想像力が更に自由に解放されるように別の遊びを工夫することである。

このとき私は自動玩具を一杯持っているこの子の世界が開かれるのには、形のない物質の素材が必要と考え、絵の具と筆を用意した。私が筆に絵の具をたっぷりつけると、T夫はビンの中を筆でかきまわしてから皿と電車に絵の具を塗った。いくつも塗った。そのときはこれで終わったが、午後になって、T夫は庭の砂場で水たまりに電車を入

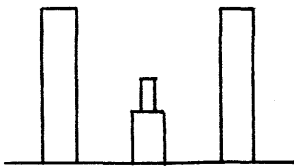


図 1



れ、その上から砂を落としていた。この日T夫は一度もうならず、プロペラも手に持たなかった。物質によって彼の心の枠がひとつ開かれたのではないかと思う。

その翌日T夫は一寸したことでパニックをおこしたり、何かとぐずり、朝から母親にくっついていて。私はいろいろと苦勞しながら一日を過ごした。午後になり、T夫は電車を走らせるのでなく、横に倒すことを繰り返して遊んだ。これはこの一日の過程の後に生まれたこの子のテーマのひとつである。自分の象徴ともいえる電車を自分の手で横倒しにすることは、垂直に立てることにひとしい意志のはたらきである。T夫は朝来たときから、私には分からない何かの理由で落ち込んでいた。電車を倒すことによって、彼は落ち込んでいた自分を表現していたのだろう。外から見ればそれはパニックと見える。

更に一週間後、T夫は大きな箱積み木を二本自分の体の両側に垂直に立て、自分がその間に立った。そして頭の上に絵本をおいて天井にし、両肘で積み木をバシと倒し、ケラケラと笑った。何度もそれを繰り返した。F先生は桃太郎の誕生だと言った。周囲にいた人

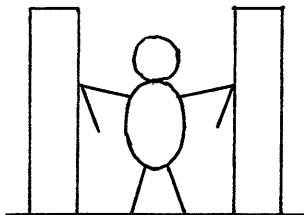


図 2



達は本当にそうだと思った。自分の殻を破ってT夫は広い空間に出て来た。T夫は大きな口をあけて笑った。このことについて別のところに記したが、これが可能になった過程には、子どもと保育者との両方にミニアチャーの想像力があつたのである。ミニアチャーの斜面で上方への光を見出した子どもは、現実の世界ではさまざまな抵抗によつて実現しえないことをミニアチャーの世界で展開させはじめた(図2)。

保育者が子どもと一緒に身をかがめて何かをしている。第三者には何をしているのか分からなくとも、子どもと保育者との間には豊かな想像力の世界がひろがっている。それなしには保育はないだろう。

(愛育養護学校)

注1 「まわるものへの関心」『幼児の教育』八十三巻三号(『保育の一日とその周辺』フレール館 一九八九所載)